OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歴史家ケン・イングリスとオーストラリアの第1次世界大戦の記憶
Author(s)	藤川, 隆男
Citation	パブリック・ヒストリー. 2004, 1, p. 51-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66413
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Public History, Vol.1, 2004, pp. 51-56
Ken Inglis and the Memory of the First World War in Australia
Takao FUJIKAWA

歴史家ケン・イングリスとオーストラリアの第 1 次世界大戦の記憶

藤川隆男

はじめに

2003 年 9 月第 2 週に開かれた日英歴史家会議は成功のうちに幕を閉じた。レジュメのコピーが足りずに走り回ることもあったが、それはご愛嬌というところか。真夏よりも蒸し暑い天候にもかかわらず、イギリスから来た歴史家たちが熱心に討議に参加していたのは、印象深かった。まあ費用はすべて日本もちなので、当然といえば、当然だが。初日は聴衆の 1 人として、3 日目はレスポンデントの 1 人として、また、夜のレセプションでは自由に多くのイギリスの歴史家と交流をもてたのは、よかったと言えば、よかった。

学生であったころ、めったに会えることのないヨーロッパ人の歴史家の話を聞くことができるのは、心がうきうきするようなイベントであったが、今回、展覧会のように歴史家が来ても、それ自体に面白味はない。内容が問われる時代になったのだと思う。内容は悪くはなかったと思うが、驚きにも、新鮮さにも欠けている感じがした。

私がオーストラリアに留学し、その後も毎年訪問するようになったとき、 1 人の歴史家の発表を聞く機会をえた。書物を通じてはよく知っている人物であったが、その話を実際に聞くのは初めてであった。その歴史家とはケン・イングリスである。

イングリスは、メルボルン大学で、日本でも知られているジェフリー・ブレイニーと机を並べ、マニング・クラークに師事した後、オーストラリアの大学で教鞭をとるようになった[(1)]。その専門領域は社会史であり、公共放送 ABC の研究やアンザック・デイの研究で知られる歴史家である。私のオーストラリア国立大学における師であり友人でもあるドン・ベイカーに言わせると、イングリスこそ 20 世紀オーストラリア最高の歴史家である。ドンも同じく、ナショナル・

(1)　Inglis, K.S., (Wilcox, Craig ed.) *Observing Australia 1959 to 1999*, Melbourne University Press(MUP), 1999, p.3.

アイコンの 1 つとまで言われるようになったクラークに師事し、その親友であったことを想起すると、この評価には考えさせるものがある。実は、私も同じように感じていた。ドンが自分から言いだすまで、ドンに遠慮をして言うのを控えていたが、長年そう感じていた[(2)]。

イングリスの発表には、これまで味わったことのない新鮮さがあった。話としてのおもしろさ、話術としての完成度は、自由に英語を使いこなすことのできない私にとっては、到達することのできない領域のように思われた。聴衆を笑いでもてなしながら、高度な歴史を語る技術を、とてつもなく、うらやましく感じた。彼のどの著作よりも、イングリスの発表のスタイルが私の記憶には鮮明に残っている。日英歴史家会議に集まったイギリスの歴史家には、残念ながら、そのような感覚を豆粒ほども抱かなかった。このイングリスとオーストラリアの戦争の記憶について、以下で少し雑談したいと思う。

1　アンザック・デイ……記憶から歴史へ

私がイングリスを好きなのは、あえて理由をつけると、研究対象の選び方であり、その提示の仕方である。イングリスが研究対象としたのは、日常生活で誰もが出会うもの、日常の生活や文化であり、普通の人（歴史研究の専門家でない人々）が疑問を抱く対象である。ごくありふれた対象を、歴史家の手法で研究・分析し、平易な言葉で語り伝える。そこには特別なことは何もないが、最高度の平凡さがある。

同じ西洋史の研究者でも、ごく近接した領域の人間しか、なぜそのようなテーマの研究をしているのか想像もつかない、多くの日本の西洋史研究者。ポストモダニズムなどの高度な理論で民衆や民衆生活を語るけれども、普通の人には何も理解できないものを書く研究者とは異なり、イングリスには特別な衣装で身をまとうところがない。私はそこが好きだ。だからこそ、その話に引き込まれるのだ[(3)]。

イングリスは、もともと宗教史に関心を抱いていたが、のちに「20 世紀に宗教性、信仰、聖なるものの意味に何が起こったのか[(4)]」、20 世紀になって民衆にとってのキリスト教に取って代わったものに興味を抱くようになった。その答えの 1 つがアンザック・デイであった。

アンザック・デイは、第 1 次世界大戦でオーストラリア・ニュージーランド軍団（アンザック）が、トルコのガリポリ半島に上陸したことを記念して設けられた日である。1915 年 4 月 25 日、ダーダネルス海峡北岸のガリポリ半島に展開するトルコ軍戦線を突破するため、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド軍を中心とする遠征隊が半島南端に上陸した。3 万 3000 人以

---

(2)　*Ibid*., p.10:『オーストラリアの伝説』の著者ラッセル・ウォードも同様のコメントを残している。

(3)　Inglis, K.S., *The Australian Colonists*, MUP, 1974 は、オーストラリア社会史の草分け的な作品であると同時に、イングリスの特徴がよく現れている。また、拙著『オーストラリア歴史の旅』（朝日選書）の第 1 日（1 章）は、イングリスの影響を受けた。

(4)　*Observing Australia*, p.5.

上の戦死者（うち約 4 分の 1 がオーストラリア軍兵士）を出して、作戦は失敗したが、この悲劇はオーストラリア国民国家の神話の中核として語り伝えられ、儀式化されるようになった。(5)

初めてアンザック・デイが祝われたのは 1916 年 4 月 25 日で、ガリポリ半島において軍による戦死者追悼として挙行された。1920 年代中頃に、オーストラリアの祝日として各州に広まり、多数の関連するモニュメントが建築され、オーストラリアのアイデンティティを象徴する祝日になった。アンザック・デイには、オーストラリアの各地で行進、花輪の贈呈、演説などが行われ、長くオーストラリアで最も重要な祝日であった。

クィーンズランド州の小さな町バウエンの戦争記念碑

このように、もとは第 1 次世界大戦の犠牲者を悼み、その功績を顕彰する祝日であったが、のちに第 2 次世界大戦からイラク戦争にいたる他の戦争による戦没者慰霊・顕彰の役割も兼ねるようになった。さらに最近では、ニューヨークやバリ島のテロの犠牲者も慰霊の対象に加えられるようになっている。その結果、アンザック・デイは、再び息を吹き返しつつあるように見える。

イングリスによれば、大戦間期の子供とって、第 1 次世界大戦は「学校教育において、カリキュラム内でもその外でも重い存在であった」。アンザック・デイの直前に、「教師たちや来賓の人々は、私たちを 1 つの国民にしたガリポリへの上陸を記念する神聖な日に向けて、生徒たちに心構えを説いた。」さらに 5 月 24 日の帝国記念日は半日休みとなり、ユニオン・ジャック、1 袋のお菓子、太陽の沈むことのない帝国に関する教訓が生徒たちに与えられた。また、11 月 11 日の休戦記念日にも、第 1 次世界大戦の死者を悼んで、頭をたれた。(6)

第 2 次世界大戦後、イングリスはオーストラリア人が戦争記念碑によって顕彰しようとし、それにかかわる儀式によって生み出そうとしているものと宗教の関連を探求するようになった。イギリスのある史学ジャーナルの編者は、当時イングリスの論文を見てこう評したという。「映画や、通俗科学、2 つの世界大戦の精神的な影響への言及は、学術雑誌にふさわしいとは考えられない」。それをオーストラリアの歴史研究の主要なテーマにまで引き上げたのは、イングリスの大きな功績である。(7)

イングリスは、大学の研究者がアンザックについて何も語らないことを問題とし、チャール

(5)　藤井秀明 00「アンザック・デイ」藤川隆男編・監修『オーストラリア辞典』＜ http://bun45.let.osaka-u.ac.jp/dict/index.html#dict ＞、(2003 年 10 月 3 日参照)。

(6)　*Observing Australia*, p.61.

(7)　*Ibid*., p.62.

ズ・ビーンの戦史研究[8]のような優れた著作が、歴史研究の一部として取り入れられていないことを批判した。1965 年には、左翼的な文芸誌『ミアンジン』*Meanjin* にイングリスの論文が掲載されると、世界大戦がオーストラリアに与えた歴史的重要性が、専門的な研究者によって急速に認められるようになっていった。アンザックは、記憶から歴史へ、オーストラリアの軍事社会史の領域へと進んだのである。

オーストラリアでは、戦争とその記憶が早い時期に登場したが、その後、この分野の発展は遅々としたものであった。多文化主義の時代にあって、先住民や女性史、移民史などの研究が主流になると、アングロ・オーストラリアの伝統の研究は時代に合わないものとみなされるようになった。ところが、ヨーロッパやアメリカにおける、集団的記憶、公的な歴史的記憶の形成や、モニュメントや儀式、事件自体よりも事件にまつわる言説への関心の高まりが、再びイングリスの研究に脚光を当て、彼を歴史研究の最前線に押し出したのである。イングリスは、研究の重心を歴史的モニュメントに移し、1998 年に『聖なる場所』を著した。これについては、次節で述べたいと思う[9]。

2　聖なる場所

アンザックの戦いは、どこから見ても帝国の戦争である。オーストラリア人とは何の関係もない土地に行き、帝国のために無駄な血を流したことと、それがオーストラリア・ナショナリズムを象徴する事件となり、神聖な行為として顕彰され、儀式化されることとのあいだには明らかな矛盾が横たわっている。この矛盾を背景に、帝国主義の戦争が、オーストラリア国民国家の生誕の儀式に読み替えられるということが、政府のレベルでも、市民のレベルでも広く起こった。

本来の戦争の目的、イギリスの帝国主義、ドイツやトルコなどの戦った相手は捨象され、自発的に戦争に赴いたオーストラリア兵士の自己犠牲の精神、純粋さだけが、アンザック神話では強調された。戦争で流された血それ自体が神聖なものとされ、オーストラリア国家のために流された犠牲として顕彰されたのである。これによって、何者にもましてアンザックに加わった兵士が、オーストラリア国民、オーストラリア国家について語る資格を得た。たとえば、各州に設立された退役軍人連盟は、退役軍人の 3 分の 1 程度を組織しただけであったが、きわめて大きな発言力を持つようになった。

イングリスの『聖なる場所』[10]は、アンザック神話を「もの」、モニュメントの歴史として読

---

(8)　吉田祥子 0501「ビーン、チャールズ・エドウィン・ウドロウ」藤川隆男編・監修『オーストラリア辞典』＜ http://bun45.let.osaka-u.ac.jp/dict/index.html#dict ＞、(2003 年 10 月 4 日参照)。

(9)　アンザック・デイに関して、気になる歴史家がもう一人いる。*Mr Bligh's Bad Language* で知られているメルボルン学派のグレグ・デニングである。短い論考だが、Dening, Greg, 'Anzac Day', *Performances*, University of Chicago Press, 1996, pp.225-232 を参照してほしい。

(10)　Inglis, K.S., *Sacred Places: War Memorials in the Australian Landscape*, Miegunyah Press(MUP), 1998.

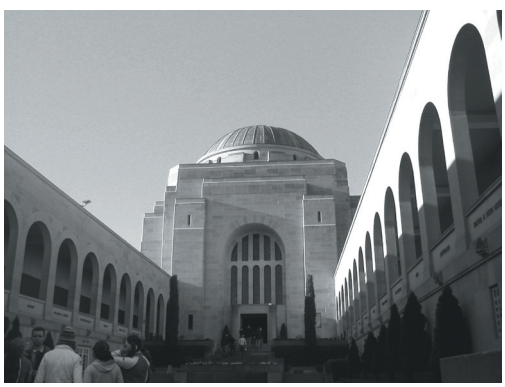
み解こうとする研究である。植民地時代のモニュメント、ボーア戦争に関する記念碑を導入として、第 1 次世界大戦と戦争記念碑建設運動、その除幕式、オーストラリア兵士のために建造された海外での慰霊碑の状況、首都と州都の記念碑建造を扱い、さらに第 2 次世界大戦後の戦争記念碑、現在の記念碑の状況と式典を扱う、オーストラリアの戦争記念碑と式典に関する包括的な研究である。ここではその全部をとても紹介することはできないが、第 1 次世界大戦後の記念碑建設について紹介し、後の論考への橋渡しとしたい。

戦争記念碑建設の動きは、すでに戦争中から各地で始まった。その目的は戦死した兵士を悼み、その行いを顕彰することであった。しかし、戦時中は、戦争に必要な資金や資源が記念碑建設に流用されることを危惧した政府によって、正式の記念碑ではなく、仮の戦死者目録で代用することが勧められていた。戦争が終わり、このような制限が不必要だと感じられるようになると、ほとんどすべての都市、町、村が記念碑の建設に動いた。

新聞や戸別訪問による募金活動、ダンスや会食による資金調達が広く行われ、土地や建築材料、労働の無償提供も普通に行われた。プロジェクトは多くの場合、地方の銀行家たちの支援を受け、募金活動の途中で建設は始まった。多くの記念碑は、町の中心部や中心に位置する公園、公立学校の前など、コミュニティーの中心部に建設された。キャンベラに近い町、ゴールバーンに典型的に見られるように、中には、町を見下ろす丘に建設される場合もあった。

これらの記念碑の建設は、全くと言っていいほど、政府の支持も援助も受けずに行われた事業であった。そういう意味では、民衆による戦争の犠牲者の慰霊と、戦争参加者の顕彰の活動であった。第 1 次世界大戦は文脈から切り離され、コミュニティーの犠牲者たちの追悼と顕彰がそのテーマとなったのである。

他の国と異なって、戦争から無事生還した兵士の名前も、戦死者と並んで石碑に刻まれる例が極めて多いのが、オーストラリアの特徴である。その例は、半数以上の戦争記念碑に及ぶ。オーストラリアの戦争記念碑は、単に戦死者に捧げられたものではなく、自発的に参加したすべての兵士の顕彰の目的も兼ねていた。戦争に加わったものと、加わらなかったものを区別する意識が、2度の徴兵制を求める国民投票が戦争中に失敗した後も、長く残り続けていたのである。(11)


キャンベラのオーストラリア戦争記念館

首都キャンベラと州都の戦争記念碑の準備は、地方レベルよりも早く始まった。キャンベラとシドニーでは、戦時中に計画は始まり、他の州もこれに続いた。しかし、その多くは 1930 年までに完成することはなかったので、

(11)　*Ibid*., pp.107-179.

戦争で傷ついた人々の心を癒すのにはあまり役立たなかったと思われる。

これらのモニュメントの目的は、国家として兵士の犠牲を顕彰することであった。それぞれの州が、ナショナルを冠する戦争記念碑を建造したことは、国家としての州への帰属意識が、連邦結成後数十年を経てもまだ強かったことを表している。記念碑の建設用の用地は各政府が提供し、その費用は小さな州の場合には国民の寄付金でまかなわれ、大きな州の場合には政府による援助が行われた。首都キャンベラの戦争記念館は、連邦政府が全責任を負って建造した。これらの記念碑のなかで、キャンベラの戦争記念館に短く触れて、この論考を閉じたい。

キャンベラの設計者、ウォールター・バーリー・グリフィンの都市計画には、戦争記念館の建設予定は全くなかった。しかし、ジャーナリストであり、戦史家でもあった、前述のビーンの提案を受けて、慰霊碑であると同時に、戦争の博物館であり、文書館でもある戦争記念館が、キャンベラの中枢部に建設されることになった。その計画や建設には、市民が全く関わっていないことが、大きな特徴である。他方、ビーンは、その戦史において、戦争指揮や作戦よりも、兵士たちの経験に重きを置いたが、その姿勢は、軍歴に関係なく、すべての死者の名前を記載した回廊に反映されている[12]。

計画から、デザインのコンペを経て、建設が正式に決まったのは 1929 年であった。労働党スカリン政権に代わったライオンズ政権は、1931 年に、『西部戦線異状なし』や『武器よさらば』を輸入禁止図書にした。このような背景を背負って、戦争記念館の建設者は、この種の戦争に批判的な意見に抗し、戦争の神聖さを訴えかけることを重要な任務とみなすようになった。1934 年に工事が始まり、完成したのは第 2 次世界大戦中の 1941 年であった。しかし、皮肉にもオープニングのセレモニーは、第 1 次世界大戦中、徴兵制に反対した労働党カーティン首相列席のもとで、執り行われたのである[13]。

キャンベラの戦争記念館のような長期にわたる事業に、単一の意味を与え、歴史的に解釈することは困難である。私たち歴史家にできることは、1 つの解釈を一般の人々に押し付けるのではなく、イングリスのように、疑問点をはっきりと提示し、人々に様々な観点と多様な知識を提供することで、より多くの情報で適切な判断をしてもらえるようにすることではないだろうか。以下の論考もそのような情報の 1 つとして見てもらいたい。

---

(12) 兵士の体験に重きをおくビーンの戦史の手法は第 2 次世界大戦後、各国の戦史家によって取り入れられることになった。

(13) *Sacred Places*, ch. 7.